

学術情報システム—書誌ユーティリティの誕生と軌跡

(レジュメ (抄))

2009年2月6日

雨森 弘行

今から半世紀前の地方大学では、戦争の後遺症もあって図書館の蔵書は貧弱であったため、それを補うための図書館間の資料相互貸借 (ILL) 業務は、学術研究活動を支える研究図書館機能の観点から見て、大学図書館の最も重要なサービス業務の一つでした。そのため、当時、弘前大学の医学部図書館に就職して間もない私にとって、その主務であった ILL 業務を遂行する上で、他館の蔵書の有無を正確に確認するための学術雑誌総合目録 (以下「学総目」と略称) は不可欠のツールでした。それ故、あの個々の雑誌の巻・号の欠落の有無までも詳記したデータの精粗は、実務者にとっては、迅速なサービスの成否を左右する要件となるものでした。それだけに、周期的に巡ってくるその所蔵データの確認調査作業は、数週間に亘り書庫の中に潜り込んで埃まみれになって、雑誌の一冊一冊を丹念に手にとりながら、タイトル頁の書誌的事項を繰り返し確認していくという極めて根気の要る作業ではあったものの、確かな充実感も同時に得られたものでした。そのような体験から、「書誌ユーティリティ」(「国または地方レベルの総合目録の作成、維持、提供、利用を中心とした情報システムのサービス、又はその提供機関」の意(宮澤。))という言葉は、私にとって特別の感慨を催す用語となっております。

さて、我が国の書誌ユーティリティは、それぞれルーツの異なる「学総目データベース」と「オンライン(図書)目録データベース」とが合体したものであるといえますが、学総目データベースはそのルーツを辿れば、今から半世紀以上も前の昭和28年(1953年)に刊行された文部省大学学術局編『学術雑誌総合目録(自然科学欧文編)』、『同(人文科学欧文編)』まで遡ることができます。それ以来、学総目は時代の流れとともに数度に亘る転機を経ながらも、文部省と大学図書館を中心とした関係機関との間の絶妙なコラボレーションによって成長を続け、1980年の学術審議会答申「今後における学術情報システムの在り方について」によって構想され、具現化される「学術情報システム」の中核機能の一つとして包摂されることにより、両データベース合体の契機を得ることになります。その後、1986年の学術情報センターの創設とともに、書誌ユーティリティとして確立し、発展していくことになります。

このことが、我が国の大学図書館界(のみならず公共図書館や他の館種をも含めた図書館界全体)にとって革命的な出来事であったことは、その後の発展の過程を見ると一目瞭然です。それだけに、このたびの“NACSIS-CAT 登録一億件突破”という快挙は、まさに記念碑的成果であり、その誕生に関わった者の一人として誠に感慨無量です。これまで、この書誌ユーティリティの構築にご支援・ご協力を賜りました全国の関係者の皆様のご熱意とご協力に対しまして、元当事者の一人であり今も仲間の一人として、心から謝意を表したいと思っております。

そこで、本日は、この「書誌ユーティリティ」に焦点を絞って、その誕生にまつわる様々な事柄や、それらに関わった方々の動静など、これまで著された研究論文や報告書などの文献の中からは、あまり窺い知ることができない事柄につきまして、これまで私自身が直接・間接に体験しました幾つかのエピソードを交えてご紹介申し上げたいと思っております。